



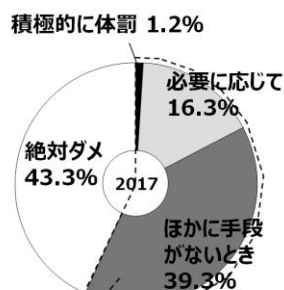
夏見台幼稚園・保育園 ニュースレター 2023.1.25 号

夏見台幼稚園・保育園でのこ
わりをニュースレターにまとめます。どうぞご覧ください。
※配信停止の方はメールでどうぞ (info@treponte.jp まで)

〒273-0866 船橋市夏見台 2-16-1 夏見台幼保園

意外と多かった「体罰容認派」

2017:しつけのための体罰について (全国20歳以上2万人：NGOセーブ・ザ・チルドレン調査)

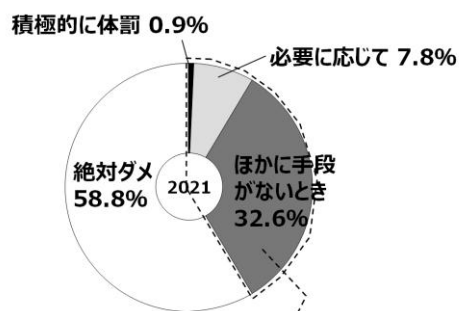


6割が体罰を容認

NGO「セーブ・ザ・チルドレン」が2017年に発表したものです。全国の20歳以上2万人に、しつけのための体罰について行ったアンケートです。実に6割の人が体罰を容認しています（積極的に容認1.2%＋必要に応じて容認16.3%＋ほかに手段がない時39.3%の合計）。

同様の調査が3年後になると、体罰容認は2割ダウンしました。

2021:しつけのための体罰について (全国20歳以上2万人：NGOセーブ・ザ・チルドレン調査)



4割が体罰を容認

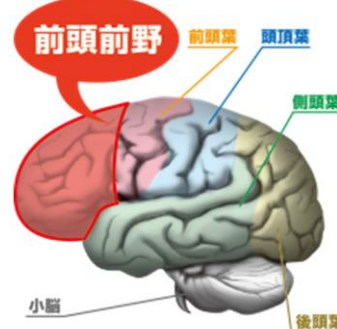
この3年間の間に何があったのか？

「体罰容認」から「体罰はダメ」に変更した理由について聞くと、半数以上の人が次のようなことをあげました。

「体罰などが子どもに与える影響を知ったから」
「虐待などのニュースを見聞きしたこと」

体罰が子どもの自己肯定感を下げってしまう事や脳科学的にも悪い影響を及ぼすなどが世間に広まり、認識が変わったということです。実際次のようなことがわかっています。

厚生労働省によると、厳しい体罰で感情などをつかさどる脳の**前頭前野**の容積が**2割**近く萎縮し、言葉の暴力で**聴覚野**が変形するとの研究もある。



今までは容認されてきた厳しい指導（体罰等）はもはや通用しません。しかしそれでも体罰を容認するという考え（価値観）も存在します。

特に保育の現場。最近虐待のニュースを聞く機会が増えました。あれはともすると、今まで当たり前のように園で行われていた保育に対し、新人の保育士が告発する形で出てきます。

吹上多摩平保育園 元保育士
「虐待とっていないのか、とにかく集団を重視している保育園。それに外れる子供が悪いと思っているのかなと。『（園長は）あれは虐待じゃない。あれはちゃんと意味があることなんだから』という話を私に伝えてきていました」

東京の吹上多摩平保育園で起こった幼児虐待。園長は否定していますが、自治体は刑事告発を検討しています。その園で働いていた元保育士の言葉を紹介しました。

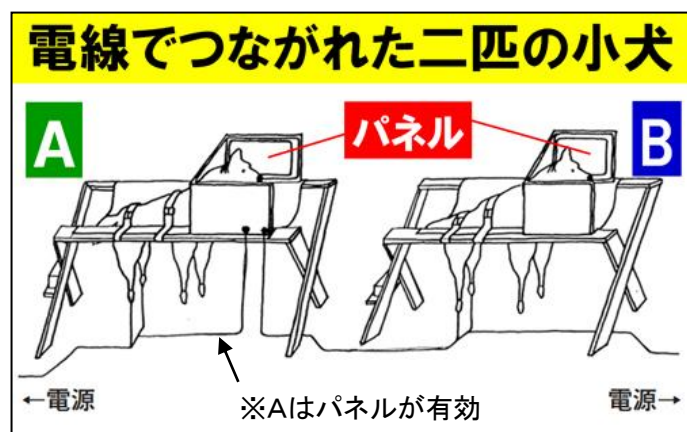
園長はよかれと思って体罰しています。それが子どもの発達に必要なのだという認識、保育観・子ども観。

残念ながら、今後も園での体罰のニュースは続くと思われます。体罰を行っている保育者は「善意」で行っているからです。これは教育行為なのです。

私たちの園で働く先生から聞いた話ですが、その先生はかつてさまざまな園で働いてきました。実際に体罰の現場も見てきたといいます。しかしその園の園長先生は、子どもと遊ぶときに、本当に心の底から楽しそうに遊ぶそうです。そしていざとなると「真剣に」体罰します。それが子どもにとって良いことだと信じて疑わないからです。

こうした価値観（保育観・子ども観）が変わらない限り、見えない体罰はなくならないでしょう。お部屋に監視カメラをつけたところで、カメラない場所で「善意の」体罰は起こりうるのです。

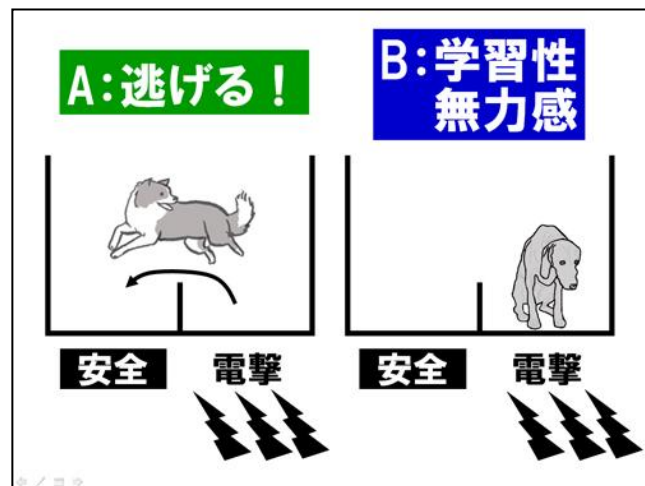
なぜ体罰はいけないのか、もう1つ根拠を書きます。今となってはできない動物実験です。



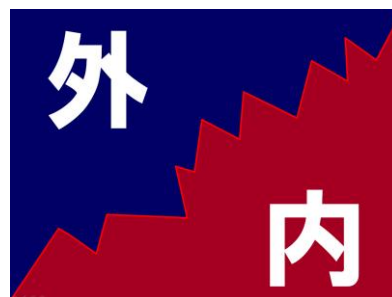
電線につながれた2匹の子犬。不規則に電流を流します。しかしAは、犬がパネルに触れれば電流が止まるようになっていました。Bは止まりません。自分の意思とは関係なしに電流は止まります。これをくり返します。

そして成長したその犬に再び電気刺激を与えます。拘束はありません。自分の意思で電流を止めていたAの犬は、ただちに逃げます。しかし自分の意思で電流を止められなかったBの犬は、ただ電流を受け続けたといいます。無力感を学習してしまったのです。

虐待は「意欲」を奪います。



人工知能が様々な仕事を行う社会では、人間の「モチベーション」が大切になります。意欲・やる気を育てていかなければなりません。



教育には2つの大きな流れがあります。子どもを「外」から教え込むか、「内」から引き出すのか。約250年前、ルソー

以来の論争です。

体罰は「外」からの教育の最たるものです。先ほど紹介した脳科学の知見などにより、価値観は変わってくるのでしょうか。

私たち夏見台幼稚園・保育園は「内」側の立場をとります。子どもの意欲を育むことは、これからの社会に生きる子どもにとって最も大切だと思うからです。(終)